女の子を買って
一緒に冬ごもりする話

この辺りの冬は厳しい

秋の間に食料を保存し

春になるまで
冬ごもりを行うのが慣習だ

しかし、全ての家が万全の状態で
冬を迎えられるわけではない

毎年怪我や病気などで
十分な食料を確保できない
家が数軒出てくる

その対応策の一つに、
独り身の男の家に
「家事手伝い」として
妻や娘を預け、

その代価に食料を
分けてもらうというものがある

家事手伝いというのは
外聞を意識した名目だ

今夜からいい？

家に籠るしかないこの時期に
わざわざ雇う必要はない

バタン

この時期は一年で
一番時間に余裕のある
時期でもあり、

過ごし方次第で
この時期への印象はガラリと変わる

…暗黙の了解として

冬の間、彼女のことを
好きにして良いことになっている

後ろめたい
気持ちもあった

しかし、彼女が自分から
ベットへ登り、

ギシ

体を差し出した瞬間
跡形もなく吹き飛んだ

彼女とは
今日までほとんど
面識はない

ちゅぷ
ちゅぷ

彼女の父親と
少し付き合いがあり、
昔ちらりと
顔を合わせた程度だ

フル

フル

ジュプ
ジュプ

こんなに自分好みに
育っているとは
思ってもみなかった

女日照りの生活が
しばらく続いていたこともあり
少し手荒くなってしまったが

ギュッ

彼女は拒むことなく
受け入れた

ジュプ ジュプ

義理堅いからなのか、
気弱な性格だから拒めないのか、
どんな子なのか知らないまま
彼女を犯した

パンッ パンッ

うーん…
対価はそれなりに高く、取引に応じるべきか悩んだが、
この子の体を自由にできるなら安いものだ
ふうっ
ふうっ
はぁっ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ

取引に応じて正解だった

パンッ

パンッ

パンッ

パンッ

パンッ

パンッ

ふうっ

ふうっ

ふうっ

ビクッ
ビクッ
ビクッ
ぶんっ
ドクンドクッ
…ドクッ
はーっ
はーっ
はーっ

結局、
最後まで拒むことなく
受け入れた

ズルッ

少しだけ罪悪感を覚えたが、
それ以上の優越感が
心を満たした

ビクッ

一度や二度では
到底満足できない

ビキッ

はぁ、

はぁ、

まだ大丈夫？

ビクッ

何度も何度も、
朝日が昇るまで
彼女を犯した

ドロォ

それからという日、
ヤりたい時
ヤりたいように
彼女を抱いた

スゥ
スゥ

スゥ
スゥ

この家にベッドは
一つしかなく
一緒に眠っている

ブルン
ブルン
ブルン
ブルン

ここ最近は
朝勃ちを彼女で
処理するのが習慣だ

パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
ジュプ
ジュプ

彼女もここでの生活に慣れつつある

ハァ
ハァ

抱かれることへの抵抗感が薄れ、

ずちゅっ
ずちゅっ
ずちゅっ
ずちゅっ

肉体的な相性も日に日に良くなってきている

パンッ
パンッ
パンッ
パンッ

ビュルルッ
ビュッ
ビュッ
何度抱いても飽きそうにない
ドクン
ドクン
ドクン

彼女の心も体も

ズル

ここでの生活に
慣れるように、

ズルル…

自分に合わせるように
変化しつつある

ズルンッ

そのことに快感を
覚えてしまっている
自分がいる

はぁっ

はぁっ

こぷ♡

ムニ

ムニ

部屋が温まるまで
このままでいようか

冬ごもりを初めて
2ヶ月が経った

パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ

毎日勃たなくなるまで
彼女を抱いている

はぁっ
はぁっ
はぁっ
はぁっ

パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ

フル
フル

パタン

仕事も娯楽も
限られている中、

ふー

ちら
ちら

一日中狭い空間で
ずっと一緒に過ごしている

そんな中、
気兼ねなく抱ける女が
いつもすぐ近くにいるのだ

少しでも
ムラムラすれば
その度に抱いた

ギシッ

ちゅぷ

ちゅぷ

ぢゅるっ♡

ぢゅるるっ♡

ぷはあ

彼女にも明らかな
変化が訪れた

はぁっ

はぁっ

パンッ

パンッ

パンッ

パンッ

初めの頃は
ひたすら受け身だったが、

今では快楽を得ようと
性に対して積極的になった

はッ♡

はッ♡

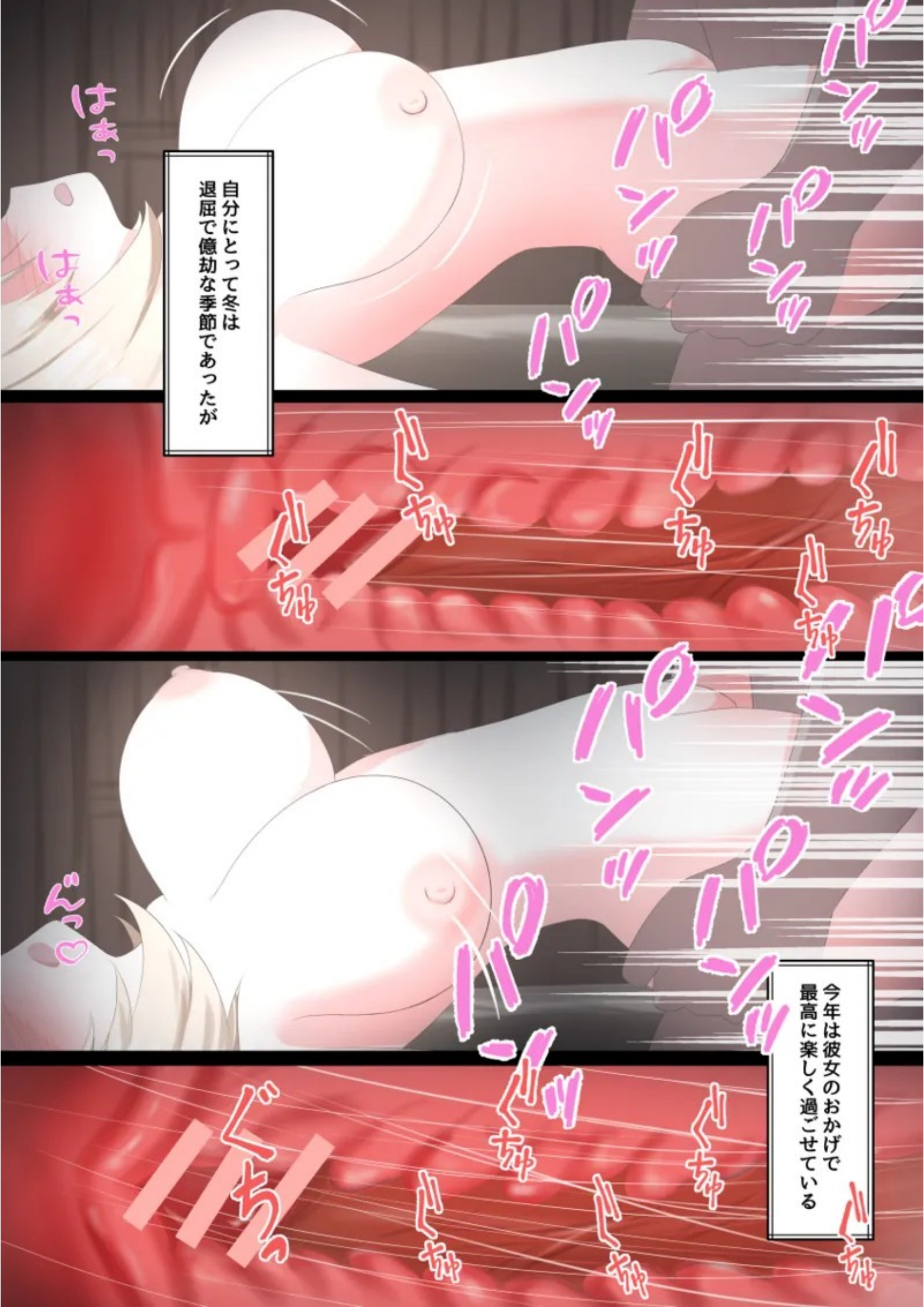
くちゅ

くちゅ

くちゅ

くちゅ

ずちゅっ
ずちゅっ
ずちゅっ
ずちゅっ
以前まで行為の最中はずっと耐え忍んでいるようであったが、
今では自分と同様この時間を楽しんでいる
はぁっ
はぁっ
はぁっ♡
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ


はぁっ
はぁっ
自分にとって冬は
退屈で億劫な季節であったが
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ
ぐちゅ
んっ♡
今年は彼女のおかげで
最高に楽しく過ごせている

彼女を買って
本当に良かった
ビュルルルッ
ドクン
ドクン
ドクン

ズルッ
はぁ
はぁ
ぬるぬる

まだ大丈夫…

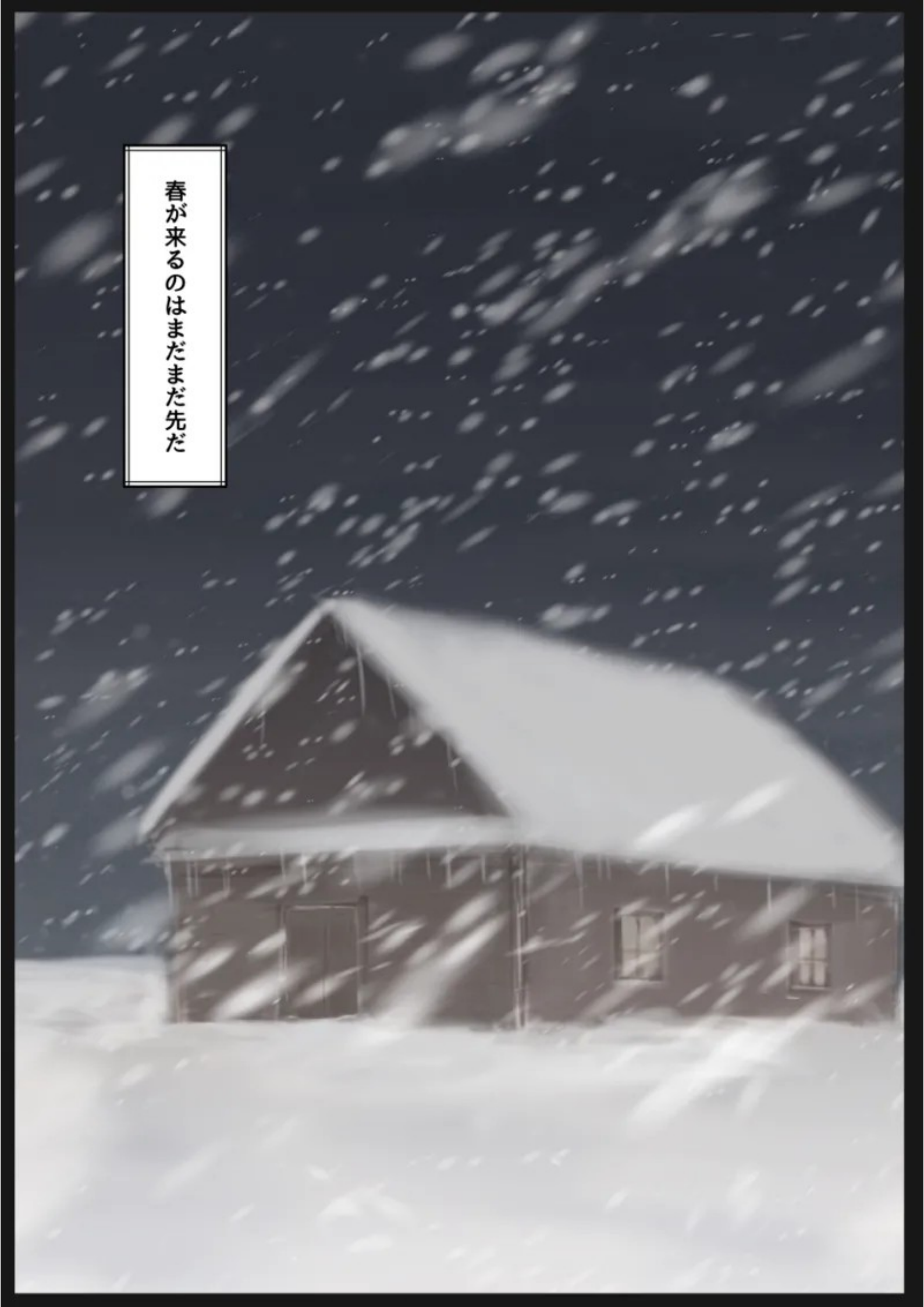
はぁ～♡

はぁ～♡

スリスリ

ずちゅっ
ずちゅっ
ずちゅっ
ずちゅっ
冬ごもりはようやく
半ばを過ぎたばかり
はぁ、
はぁ、
ぐり
ぐり

すちゅっ
すちゅっ
すちゅっ
はぁっ♡
はぁっ♡


春が来るのはまだまだ先だ

あとがき

ご購入いただきありがとうございます。

本作はジャンルとしては奴隷もののつもりで描いてみたのですが
どうだったでしょうか？
致し方ない状況で金品などを対価に一定期間身を売る展開は
個人的に奴隷ものだと思っています。

本当は１月末くらいに完成させて季節感を取り入れた
作品にしたかったのですが…
途中でおっぱいのサイズを3カップくらい増やしたり
色塗り終わった後で体位変更したりしているうちに
冬が終わってしまいそうになってしまいました。

夏には今度こそ季節感のある作品を出します。
催眠×スイミングスクールで
「催眠ぐスクール」なんてどうかななんて考えていますが
詳細は未定です。
他にもギャルものとかレイ〇ものとか兄妹ものとかいろいろと
描いてみたい癖があるので急遽変更するかもです。
気長に待っていただければ幸いです。

著者：栗山 ぼっち
発行月：2023/3

女の子を買って一緒に冬ごもりする話